

企画展 小清水漸の彫刻 1969～2024・雲のひまの舟

2024年9月14日（土）～10月15日（火） 会場：宝塚市立文化芸術センター 2階メインギャラリー、屋上庭園
 主催：宝塚市立文化芸術センター（指定管理者：宝塚みらい創造ファクトリー）
 協力：ギャラリーヤマキファインアート、東京画廊+BTAP、BLUM、YOD Gallery 後援：神戸新聞社



No.	タイトル	制作年	素材	作品サイズ(cm)
エントランス				
1	垂線	1969年	真鍮（分銅）、ピアノ線	300x8x8
第一室				
2	表面から表面へ	1971年	米桐	30x30x300（20点組）
3	表面から表面へ	1971年	米桐	30x30x150（10点組）
第二室				
4	栗の笈	1993年	栗	101.5x56x194.5
5	塔櫃	1993年	楓、大理石、皮、黄土	242x141x86.5
6	水の長持	1992年	楓、樺、青磁、黄土、水	73.5x139x63.5
7	作業台—新月のアルテミス	1997年	松、蜜蝋、松脂	110x220x90
8	そのあるところのもの	2007年	楓、石、椿、鉄、麻縄	展示空間によりサイズ可変
9	水浮器 つの浮子（立）	1988年	信楽焼、水、椿、石	43x67x64
10	水浮器—鼎座—	1988年	信楽焼、水、檜、令法、樺、石	209x130x130
11	水浮器—月の赤—	1988年	信楽焼、水、杉、辰砂、ウレタン塗料	67.5x61.5x50
12	Relief, Line —dumbball	2015年	合板、紙、パステル、針金	76x60.8
13	Relief, Line —horizon	2015年	合板、紙、パステル、針金	72.6x75
14	Relief, Line —sunset	2015年	合板、紙、パステル、針金	92.5x72.3
15	Relief, Line —balloon	2015年	合板、紙、パステル、針金	65x50
16	Relief, Line —surf	2015年	合板、紙、パステル、針金	63x60
第三室				
17	作業台—石枕	2010年	栗、鉄、縄、石	展示空間によりサイズ可変
18	作業台—クロモジ	2010年	栗、鉄、クロモジ	展示空間によりサイズ可変
19	天手力男命の机	2010年	栗、鉄、石、麻縄	展示空間によりサイズ可変
20	作業台—アリアドネのテーブルクロス	2010年	栗、鉄、麻、縄	展示空間によりサイズ可変
21	磁場	2010年	栗、鉄、クロモジ	展示空間によりサイズ可変
22	レリーフ—ウィリアムの花—	2001年	楠、陶器、金泥、漆	95x94.6x9
23	結紐文大皿レリーフ	1998年	楠、磁器皿、顔料、金泥	11x100x100
24	表面から表面へ	1973年	ケント紙、クレパス	108.5x76.5（26枚組）

No.	タイトル	制作年	素材	作品サイズ(cm)
第四室				
25	表面から表面へ	1971年	米桐	250x40x4.5（15点組）
26	作業台—表面から表面へ	2016年	木	1100x1400x800
27	スプーン—杯の音色	1997年	樺	240x120x120
2F ホワイエ				
28	水浮器	1993年	青磁、FRP、美群青、紅辰砂、紫岩、令法、大理石、水	展示空間によりサイズ可変
屋上庭園				
29	武庫の水 空へ	2024年	鉄、ガラス容器、水	展示空間によりサイズ可変

■ 作品および作品シリーズ紹介

《垂線》作品No.1
 天井からまっすぐ伸びた垂直線の先に吊り下げられた円錐形の分銅が、床の一点を指し示します。本作は、1968年に関根伸夫が発表した《位相—大地》（*）の制作現場に小清水漸が立ち合い、触発され、その翌年に発表した作品です。作家が自らの制作の原点に立ち返ったとされる重要な作品です。
 （*）《位相—大地》は「もの派」の起点となる作品とされています。

《表面から表面へ》シリーズ 作品No.2, 3, 24, 25, 26
 1971年から手掛けている作品。複数の同形木材の表面に異なる幾何学的な模様を配しています。電気ノコギリで削られた木材の表面は、木の質を変えず、見る者に作品へのイマジネーションを与えることなく、見た瞬間に作品のすべてが伝わることを意図して制作されています。

《水浮器》シリーズ 作品No.9, 10, 11, 28
 1975年以降、信楽で制作された陶器を使った作品が発表されます。小清水漸にとってはあくまでも彫刻作品の一環として、工芸とは一線を画するものと考えて制作しています。「器」と「水」とそこに浮く「浮子」とで成立する彫刻として見られるよう意図されています。

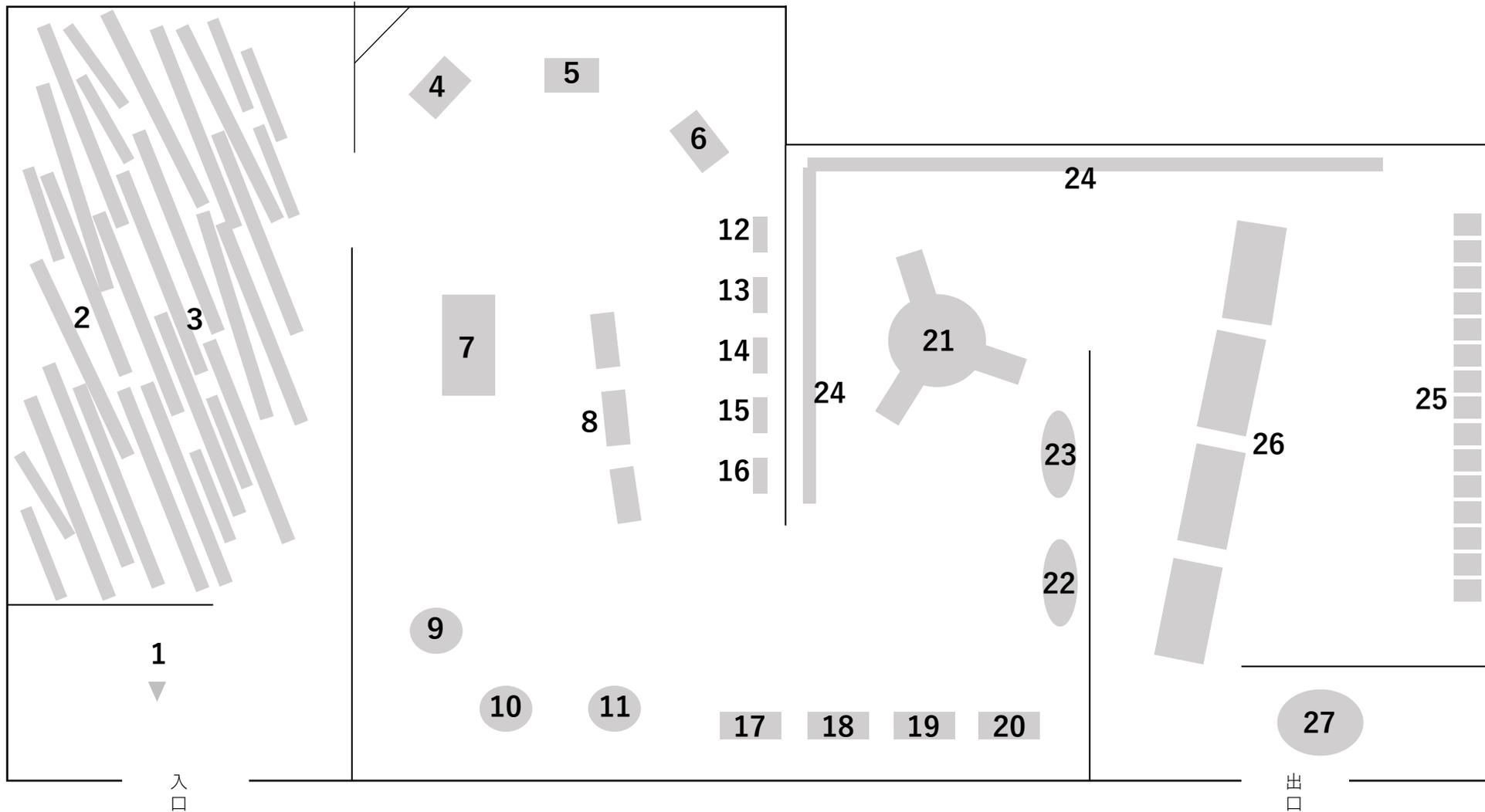
《箱》シリーズ 作品No.4, 5, 6
 1992年に初めて登場し、主に90年代に発表したシリーズです。箱には、「大切なものを収納する」という役割があります。本シリーズの作品内側は、水と黄土や、折りたためる大理石の塔などが収納される構造になっています。箱には持ち運びできる特性もあることから、どこでも展示できる「旅する彫刻」としても考えられています。

《作業台》シリーズ 作品No.7, 26
 《作業台》の最初の作品は1975年の個展で発表されました。東京を離れ、関西に拠点を移してから始めた作品シリーズです。作品を制作する台もその作品の一部となるという気づきから、「作業台」＝「テーブル」のもつ無限の可能性が作品をおとて表現されています。

《遊戯の彫刻》シリーズ 作品No.17, 18, 19, 20, 21
 2010年頃から制作しているシリーズで、一点一点は異なる表現方法がとられています。作家が自由な気持ちで制作した作品群といえます。

《レリーフ》シリーズ 作品No.12, 13, 14, 15, 16, 22, 23
 1970年代の後半以降から盛んに制作したのが、木彫のレリーフ作品です。かつて「絵画でも立体彫刻でもないレリーフというどっちつかずの世界ははるごく魅力があるのも確か」と小清水漸は語っています。また、「レリーフの表面はテーブルの天板の広がりにつながる」として、さまざまな試み（刻み目を入れる、削る、彫って木版の版木のようにする、わざと素材の異なるものを埋め込む等）が作品に展開されています。

作品配置図



29 ←

インスタレーション展示（屋上庭園）へはエレベーターでR階へお進みください。

28

